

NHK アーカイブスの美術番組の系譜をめぐる研究

河原 啓子 (本学非常勤講師・芸術文化学科・芸術文化特論I・ミゼオロジーと運営、芸術社会学・ミゼオロジー・コミュニケーション)

Research on the History of Arts Programs in the NHK Archives

KAWAHARA, Keiko

武蔵野美術大学研究紀要 No.44 (2013) 抜刷

平成 26 年 3 月 1 日

発行／武蔵野美術大学

〒 187-8505 東京都小平市小川町 1-736 TEL 042-342-6027

印刷／プリンティングイン株式会社

March 1, 2014

Musashino Art University

1-736 Ogawa-cho Kodaira-shi, Tokyo, JAPAN

NHK アーカイブスの美術番組の系譜をめぐる研究

河原 啓子 (本学非常勤講師・芸術文化学科・芸術文化特論I・ミューゼオロジーと運営、芸術社会学・ミューゼオロジー・コミュニケーション)

Research on the History of Arts Programs in the NHK Archives

KAWAHARA, Keiko

美術館、研究所、大学などでは、すでに所有している作品や資料を整理し、デジタル化などの方法で蓄積し、必要な時にすぐに検索できるアーカイブズの構築を急ぐところが少なくない。このようなアーカイブズ化が進展する社会とはどのような社会なのか。また、アーカイブズは、人々が欲しい情報を即座に獲得することを可能にさせるが、アーカイブズによってもたらされるものは、果たしてそれだけであろうか。本研究では、研究者が第二期 NHK アーカイブストライアル研究員として行った研究活動をもとに、NHK アーカイブスの閲覧によって見出された、美術番組の系譜と社会価値観の関わりについて報告したうえで、今後、コンテンツ・ビジネスや、ミュージアム・マネジメントなどに影響を及ぼすと考えられる、アーカイブズの展望を探る。日本の美術番組の変遷の一側面を示し、それを可能にしたアーカイブズというシステムについて検討する。

Many museums, research institutes, and universities have already cataloged the works and materials in their holdings, and are working to rapidly digitalize these and build archives that allow users to immediately search this data when needed. What type of society promotes the development of such archives? Also, while archives make it possible for people to immediately acquire the information they need, is this the only function that they serve? This research, which is based on studies conducted by researchers who were NHK research staff of the second-term archive trial, discusses the relationship between historical records of arts programs and social values that were uncovered by browsing the NHK archives. Further, it explores the future outlook for archives, which could conceivably be affected by such issues as contents-business, and museum management. The study presents one aspect of the changes that have occurred in Japan's arts programs and examines the archival system that made these possible.

I. まえがき

21世紀に入ってから、アーカイブズという言葉を目にする機会が増えた^(註1)。例えば、美術館、研究所、大学などでは、所有している作品や資料を整理し、デジタル化などの方法で蓄積し、必要な時すぐに検索できるアーカイブズの構築を急ぐところが少なくない^(註2)。そのような職務にあたる、専門職「アーキビスト」も生じている。本来アーカイブズとは、公的記録や古文書などの保管所、および履歴を指す。日本では、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)によって、アーカイバル・サイエンス理論すなわちアーカイブズ研究の構築の必要性が提起され、2003年に『日本のアーカイブズ論』としてまとめられた^(註3)。それによると、欧米も日本も、アーカイバル・サイエンスは歴史学などの発達とともに進展してきたことがわかる^(註4)。また、アーカイブズの定義は、「保管し、保留し、貯めるが、非自然的な仕方、つまり法を作り従わせるか、人々に法を尊敬させることによってである。」^(註5)というジャック・デリダ(Jacque Derrida)の見解もある。その概念化や理論の蓄積は、緒についたところだが、ここではアーカイブズ概念を、「ある対象を、人為的に、人間によってつくられたルール(デリダの言う「法」のもとに「保管」、「保留」、「貯める」こと)によって保存、活用、公開するシステム」として、考察を進める。また、アーカイブズを形成する情報、資料、作品などのことを、コンテンツと呼ぶことにする。したがって、アーカイブズ化が必要とされるのは、情報、資料、作品などが蓄積されている領域である。

それでは、なぜ近年、アーカイブズに関心が寄せられるようになったのだろうか。その理由は、“文化成熟”のためであると考えられる。“文化”を、“人間が手を加えて形成してきた物心両面の成果であり、学問、技術、芸術などの多様な領域”と設定するならば、それらが長きにわたって形成され分類や整理が必要になり、アーカイブズが求められる社会が出現するのである。一朝一夕にアーカイブズ化が可能な対象は構築され得ない。

ところで、分類や整理の側面で考えれば、類する社会現象が起こった時期がある。それは、18世紀以降、博物学に見られるような、さまざまな領域における分類と体系化(=“分類の思想”と称したい)が促進された時期である^(註6)。この“分類の思想”を基盤にして、「名指すことの可能性を見越した分析によって表象のうちに開かれる空間」が登場し、「《言う》ことができるであろうものを《見る》可能性、しかも、ものと語とが互いに区別されながらも表象のなかではじめから通じ合っていないならば、見たうえで言うことも、それどころか遠くから見ることもできないであろうものを、《見る》可能性」^(註7)が生じた。近代の価値観の基盤ともなった、この“分類の思想”は、人々のものの見方や考え方にパラダイム・チェンジをひき起こ

した。すなわち、見ていない対象も、まるで見たかのように認識することが可能になったのである。その後の写真の発明は、さらにそれを助長した^(註8)。

しかし、その状況と、このアーカイブズ化が起こる社会が大きく異なる点は、二つある。一つは、コンピュータの普及により、インターネットによって形成されるネットワーク、デジタルによる画像処理などが、社会に存在するところである。もう一つは、見ていない対象を見たかのように認識するのは、当たり前になっているところである。現在は、膨大なコンテンツを類型別に認識するのではなく、さまざまな既存の分類されたデータベースから、キーワードに該当するコンテンツをすべて獲得することができるようになった。このような社会において、人々は“分類の思想”に依るよりも、まるで広大な情報の海を見渡して必要な情報をいくつでも釣り上げるかのような情報の捕らえ方になってきた。この価値観を“俯瞰の思想”と呼ぶことにする。アーカイブズ形成には、多くの場合コンピュータ処理が伴う。または、コンピュータの普及が、アーカイブズ化を進展させるきっかけになったと言ってもよい。“モノ”としての資料、情報、作品が、“データ”に変換されることによって、物質的“モノ”は消滅し、整理、分類、検索が簡易になった。21世紀に入って、アーカイブズが着目されるようになったことと、コンピュータの普及が加速化した時代背景は、不可分である。そして、人々の情報の認識や獲得における価値観は、“分類の思想”から“俯瞰の思想”にシフトしつつある。

さて、このような状況を見据えるならば、アーカイブズの展望について考えることは十分に意義があると言えるだろう。アーカイブズは、人々が必要な情報を素早く獲得し、活用することを助けるだけではなく、コンテンツ・ビジネスを発展させる可能性もある。

ここでは、美術番組のアーカイブズを事例として考察する。研究者は、第二期NHKアーカイブズ・トライアル研究員として^(註9)、2011年に研究活動を行った。その際、NHKのアーカイブズの中から、美術番組に絞って約100の番組を閲覧した。「日曜美術館」以前の初期の番組は、番組数が限定されていて、ほとんど選択の余地はなかった。従って、初期の美術番組に関しては、閲覧可能なものはほぼ確認をした。「日曜美術館」以降の番組では、司会者を変更した初回のもの、出演ゲストとして、日本画家、洋画家、彫刻家、現代美術家、建築家、著述家、音楽家などを多様に選出して閲覧した。このような対象を閲覧することによって、美術番組の系譜をふり返り、文化価値観の変遷について考察し、アーカイブズの有効性や展望を検討した。その研究活動の結果から、美術番組がどのように変容し、コンテンツとしての美術番組の特徴はどのようなものかを示し、今後のアーカイブズの展望について述べたい。

手続きとして、まずⅡで、美術番組(=コンテンツ)を

受容する社会、人々の美術に対する欲望や、芸術作品の授受をめぐる社会状況などを踏まえる。次にⅢで、実際に検索し、閲覧を行った美術番組の系譜を検討する。最後にⅣで、アーカイブズ存在意義を明らかにし、さらにアーカイブズそのものの今後の展望を考察する。ここでは、NHKの美術番組のアーカイブズという切り口で、日本の芸術授受のありようを考え、その視座から見えてくるアーカイブズの展望を述べる。

Ⅱ. 美術 (=コンテンツ) を受容する社会

美術番組を受容する社会とは、どのような社会か。まず、コンテンツそのものが蓄積される社会について考え、次に日本の美術番組の切り口で考察したい。

1. マス・メディアが生成するマス・コミュニケーション
すでに述べたように、コンテンツの蓄積は、“文化成熟”の基盤の形成を前提にしている。“文化成熟”の基盤の形成を促したのは、“分類の思想”である。例えば、美術であれば、美術に文化価値が付与され、そして、絵画、彫刻、版画、といったジャンルに分けられ、さらには様式や流派といった区分法の登場といった現象のことである。1763年にJ・J・ヴィンケルマン (J・J・Winckelmann) が、著書『古代美術史』 *Geschichte der Kunst des Altertums* (1764) で、ギリシア美術の変遷を、ロマネスク様式、ゴシック様式などに分類したことは、その嚆矢と言ってよい。そして、“分類の思想”を共通認識として確定させたのが、マス・メディアであった。マス・メディアの登場は^(註10)、新聞メディアを一つの核として発展し、国内外で、近代の思想たる“分類の思想”の登場のころとほぼ同時期に登場した。新聞の場合では、イギリスでは1702年に日刊紙『デーリー・クーラント』が発行され、1772年に『モーニング・ポスト』、1785年に『タイムズ』などが続いた。フランスでは、1777年に『ジュルナル・ド・パリ』、1826年に『フィガロ』がスタートした。日本では、1871年に初の日刊紙『横浜毎日新聞』が始動した。このような、不特定多数の人々に向けた情報の発信システムが発生したことによって、“分類の思想”によって合理的な解釈が可能になった美術も、マスに受容されるようになったのである。

T・ヴェブレン (Thorstein B. Veblen) の言う「顕示的な閑暇と消費」^(註11)の背景にも、このような社会状況が横たわっている。すなわち、美術鑑賞や作品の所蔵が、王侯貴族などの限られた人々のものから、マス・メディアの情報開示によって、マスに開かれ、人々は、美術の芸術的な価値の背後に存在する富や教養を手に入れることに、価値を感じるようになった。以前は、上流階級のみ許されていた美術鑑賞は、ほかの消費財とは志向を異にする、「顕

示的」な「消費」の欲望を喚起する対象だったに違いない。マス・メディアの形成とほぼ同時期に、大英博物館、ルーヴル美術館が設立され、絵画鑑賞は、「顕示的」な「消費」のひとつにもなり、マスに開かれたのである。

そして、時代が下ると、文化や芸術を消費するという観点が、さらに明確に提示されるようになった。A・トフラー (Alvin Toffler) は、「クラシック音楽を聴き、コンサート、演劇、オペラ、ダンスリサイタル、あるいは芸術映画を鑑賞し、美術館やギャラリーなどを訪れる人」を「文化消費者」と位置づけている^(註12)。このような観点は、文化や美術の認識が、マス・レベルで広がる過程で、マス・メディアで扱われるほかの情報と同じフィールドに存在することになったことと無縁ではないだろう。

美術のマス化、そしてそれをもたらした、さまざまな社会システムや価値観の変容は、近代化として認識できる。近代化は、人々の文化欲求を促進させる地盤である。その状況は、テレビ時代に突入して、必然的に美術番組のコンテンツに対する社会的な欲求につながるようになったのである。

2. 日本独特の展覧会システム (メディア・イベント) とコンテンツ

さて、日本の美術番組のアーカイブズについて考えるために、日本の独自の美術受容についてとりあげておきたい。その独自性とは、新聞やテレビジョンなどのマス・メディアが主催するメディア・イベントと呼ばれる展覧会が^(註13)、美術受容を促進してきたことである。欧米ではほとんど見られない、メディア・イベントの展覧会が開催されるようになった主な理由は、政論新聞に対する新聞弾圧の影響で、不偏不党の編集方針を余儀なくされた新聞社にとって、メディア・イベントの展覧会が、企業のイメージアップや、顧客サービス、マス・メディアで報道する話題づくりなど、メリットがあったためである。^(註14)

美術番組コンテンツへの人々の関心は、開催されている美術展に影響されたり、展覧会を扱った番組によって喚起されたりするという、相互作用によって起こる。数多くの入場者数の獲得が期待される美術展は、マス・メディア主催展が多いので^(註15)、美術番組コンテンツをめぐるマスの関心は、メディア・イベントのシステムにも依存している。それでは、メディア・イベントの展覧会は、どのように発展したのかをふり返ってみたい。

メディア・イベントの展示の嚆矢は、1906年『報知新聞』主催の「報知新聞空前の大壮挙巡航博覧会」であった。メディア・イベントの展覧会においては、万博の影響を受けながら博覧会という展示方法をまず導入し、それが枝分かれする形で、美術展覧会に発展した。例えば、1920年には、『朝日新聞』主催で、「佛國近代絵画彫塑展覧会」が開催されている。

メディア・イベントの展覧会が、大きな発展を遂げるの

は、戦後である。1945年、終戦の年の10月に、早くもメディア・イベントの展覧会が開催された。『毎日新聞』主催「油絵と彫刻展」(日本橋三越)である。その後、1947年、国内所蔵のルノワール、セザンヌなどの作品を展示した、『読売新聞』主催「第1回泰西名画展」(東京都美術館)、同年、日本の美術団体や美術家のネットワークづくりの一助となった、『毎日新聞』主催「第1回美術団体連合展」(東京都美術館)、1949年、出品料を支払えば誰でも出品できる『読売新聞社』主催「第1回読売アンデパンダン展」(東京都美術館)、1954年、ルーヴル美術館から作品借用に成功した『朝日新聞』主催「ルーヴル・国立美術館所蔵フランス美術展」(東京国立博物館)などが開催された。戦後間もない時期から、各新聞社が精力的に美術展に取り組み、主催展を報道し、美術に関心のあるマスが形成されていった。そして、日本の美術番組の系譜をたどるうえでは、不可欠な存在である「日曜美術館」においては、NHK主催を含む、数多くのメディア・イベントの展覧会の紹介も行われてきたのである。

戦後のメディア・イベントの展覧会の発展に伴い、1956年に『日本経済新聞』、1970年代から本格的に『東京新聞』も展覧会事業に参入した。そして、美術番組の作り手、NHKは、1981年に展覧会事業に着手した。

それでは、NHKが展覧会を主催するようになったのはなぜだろうか。研究者が2011年に行った聞き取り調査では、次のような回答が返ってきた。「放送だけでは伝えきれないホンモノの作品が持つ素晴らしさを伝えることに、意義を見だしている^(註16)」。美術は、報道だけではどうしても事足りない領域である。美術作品は、作品のサイズや、色、画材の使い方など、オリジナルを鑑賞しなければ味わうことができない側面が強いからである。マス・メディアが、美術展を手がければ、報道もできるし、展示事業からも事業収益を期待できるわけで、それが現在もお、マス・メディア各社が展覧会を開催する大きな動機になっていると考えられる。先に、文化や美術の認識がマス・レベルで広がる過程で、それはマス・メディアで扱われる情報のひとつとして扱われるようになった、と述べたが、美術はオリジナルの鑑賞を促すところに他の情報と異なる特徴がある。

ところで、これまで美術館経営の側面から、メディア・イベントの展覧会の是非は問われ続けてきた。優れた美術作品を、鑑賞する機会が数多く人々に提供されることは、決して悪いことではない。一方で、美術展報道の公正性を問う向きや、美術館学芸員の展覧会企画力の向上を阻むのではないか、学芸員の人員増加を抑制しないか、という疑問も投げかけられてきた。現在は、多様な展示を報道するとか、展覧会の資金を共同出資方式にして協力関係を築いてマス・メディア側と学芸員側双方で企画を出し合うなどの方法もとられるようになり^(註17)、徐々に改善される傾向も見受けられる。

メディア・イベントの展覧会は、日本において美術の鑑賞者の増大をもたらした。同時に、鑑賞者の増大は、美術に関するコンテンツを構築することにもつながった。日本の美術番組というコンテンツを考える場合、展覧会、観客、そして番組制作は、独特な連動をしていると言える。

Ⅲ. NHKの美術番組の系譜

日本でこのように美術が受容されている中で、どのように美術番組のコンテンツが形成されたか、NHKアーカイブスをふり返りたい。

まず、ここでNHKアーカイブスについて紹介しておく。1953年のテレビ放送開始以来制作された映像や音声コンテンツを、一元的に保存(データベース、伝送システム)、活用(映像修復、新番組)、公開(ライブラリー、デジタルアーカイブスサービス、教育学術利用、保管庫ツアー)するのが、NHKアーカイブスである。アーカイブスの保管庫に収められている映像記録したフィルムやテープは、2011年3月末現在でニュース約518万項目、番組約74万4千タイトルで(川口、渋谷、各放送局に収蔵)ある。また、冒頭に示したアーカイブズ概念化における、NHKアーカイブスは、史的史料であるところは旧来のアーカイブズと共通するが、その主要なコンテンツが映像であるところに特徴があるものとして位置づけられる。デジタル技術の発達により、映像によるアーカイブズは、今後増大すると考えられる。

1. 番組コンテンツの閲覧

番組の事例を提示する前に、まず、NHKアーカイブスの閲覧について述べる。

NHKの番組コンテンツは、公開のものと非公開のものがある。公開のコンテンツは、川口のアーカイブセンターなどの施設で、無料で閲覧できる。非公開のものは、NHK職員およびトライアル研究員など、限定された人々しか閲覧はできない。番組制作者は、制作の際に必要な映像を検索し、活用している。NHKは、トライアル研究の研究結果を鑑みて、今後さらに広いユーザーに向けたコンテンツ利用サービスの提供を、検討することになっている。

コンテンツは、大別して映像と台本がある。映像は、収録された時期によって、フィルムや、ベータおよびVHSなどのビデオ、DVDなどさまざまである。閲覧は、ビデオかDVDで行うので、ビデオ化、DVD化が行われていない古いコンテンツについては、閲覧できる場合とできない場合がある。検索の際に得られる情報も、番組の構成や出演者、内容の概要がわかる場合もあれば、閲覧しないとわからないものもある。番組によっては、その番組を編集する前の未使用映像を閲覧することができるコンテンツもある。トライアル研究の研究者たちは、閲覧後、閲覧した

番組の報告書を提出し、アーカイブスのコンテンツ情報の充実に協力している。

閲覧は文字情報に比べて、格段にエネルギーを要する。閲覧を続けてゆくと慣れてくるが、インターネット検索と同様、コンテンツの的確な選択と効率的な閲覧が、ポイントになる。同時に、検索しやすいアーカイブズをつくってゆくことも必要である。

なお、ここでは美術番組のコンテンツが存在する1956年から現在までをふり返る。それは、70年をはじめまでにかけての高度経済成長、さらに80年代半ばのバブル経済、そしてバブル崩壊、2008年のリーマン・ショック、2011年の東日本大震災から現在へといたる道のりである。高度経済成長期、展覧会や美術館の増加で、数多くの観客が育ち、バブル期の質量ともに豊かな展覧会によって、教養として美術は日本で受け入れられていった。経済不況の時代にあっても、美術作品が人々の心を癒し、浄化する力には期待が寄せられている^(註18)。このような社会のニーズにこたえ、また世論の形成も助長したのが、美術番組である。したがってこの考察は、現在の日本の美術授受を考える上のひとつの切り口として、意義があると思われる。日本がマス・メディアを介した美術授受をするのは戦前から始まっていたが^(註19)、不特定多数の人々に向けた情報提供の影響は、新聞に比べてテレビジョンのほうが多大であると考えられることから、ここではその影響の一端を鑑みることができる。

2. 「日曜美術館」前史 “実験”からスタイル形成へ

それでは、研究者が実際に検索したコンテンツを中心に、NHKの美術番組をふり返る。

NHKは、1953年に放送開始、1956年には、美術番組の嚆矢と言える「美術散歩」という美術系の番組を制作した。「日曜美術館」(1997年4月～2009年3月の番組名は「新日曜美術館」)は、1976年4月に放映が始まり、現在まで続いている。同年始まった、「教養特集」(62年から教育テレビ。87年で終了)でも随時美術報道が行われているが、これらの内容は、残念ながら閲覧はできなかった。1962年には、不定期に放映される番組として、「日本の美」がはじまった(1987年2月終了)。「日本の美 日本文様」(モノクロ、23分)という番組では、15世紀から19世紀までの染織文化と、紋章の映像を、ナレーションなしで表現。番組意図を冒頭で字幕によって解説した後^(註20)、音楽と映像でつづられた番組である。音楽は武満徹、美術は杉浦康平、粟津潔と、時代をリードしてゆく作曲家やデザイナーが携わっていたことがわかる。実に実験的、かつ、芸術的な映像である。1967年には、海外取材番組「50歳のソビエト」(モノクロ、30分)のなかで、エカテリーナⅡ世が収集したエルミタージュ美術館の作品を紹介している。1968年には、絵巻の図版と『源氏物語』の内容を照合しながら解説する「日本の美 源氏物

語絵巻」(カラー、30分)と、この年の文化勲章受章者の日本画家・堅山南風と陶芸家・浜田庄司の対談「日本の美を語る」(モノクロ、30分)が放映された。「日本の美 源氏物語絵巻」は、絵巻そのものの紹介は体系的ではなく、光源氏の人生の暗い部分を描出している。語りは岸田今日子のようなようではあるが、記載はなく、その名前は明記されていなかった。1969年には、絵画売買をめぐるドキュメンタリー「現代の映像 美神の当惑」(カラー、30分)が制作された。

50年代、60年代の美術番組は、まだ断片的である。62年の「日本の美 日本文様」のように、先端のクリエイターによる番組は、現在見ても創造性に富んでいる。しかし、このような番組は、当時の一般的な視聴者の目にどのようにつつまただろうか。同番組に、価値を見いだす人々は、ほんの少数だったと思われる。67年の「50歳のソビエト」は報道的志向が強く、68年の「日本の美 源氏物語絵巻」は、作品鑑賞的であり、同年の「日本の美を語る」は、美術評論的側面を呈している。この時代の美術番組は、まだ編集や映像技術も発展途上で、番組内容も“実験”の時代と言ってよい。そして、テレビジョンもカラーの時代に入り、美術番組制作も徐々に発展してゆく。

70年代初頭は、定期放送の美術番組「日曜美術館」の助走期間である。1974年には「モナ・リザの旅」(45分)、1975年には「サルバドール・ダリの世界」、同年「文化展望」(72年から随時美術を紹介。76年3月終了。)では、「正倉院ガラスの謎」(43分)をテーマに番組が制作された。以下、この3番組の概要を紹介する。

「モナ・リザの旅」は、同じ年に開催された「モナ・リザ展」(東京国立博物館)に関連したものである。1911年の《モナ・リザ》盗難と発見までのエピソードや、日本の展示の1年前にアメリカで展示された際のケネディ大統領による展示歓迎あいさつの映像、日本の展示における展示ケースの設計の苦心談など、「モナ・リザ展」にちなんだ、情報、歴史、知識などをドキュメンタリー・タッチで伝えている。ルーヴル美術館所蔵の傑作が日本で展示されるということで、NHKでは相次いで「NHKニュース」でも、報道している。NHKアーカイブスでは、このニュース映像の閲覧も可能である。研究者は、関連ニュース映像を4本閲覧した。展覧会そのものの報道(1974年4月20日)、「モナ・リザ展」で来日した、1960年～65年にフランス文化相をつとめた美術評論家のアンドレ・マルロー氏の報道(同年5月15日、18日)、展覧会終了を伝える報道(同年6月10日)など、リアルタイムな報道がある。

「サルバドール・ダリの世界」(40分)は、ダリやシュルレアリスムの研究者であれば、高い関心を寄せるであろう貴重な映像である。ダリの生い立ちや、妻のガラの影響などを映像で紹介しながら、ダリのインタビューも収録されている。不可解な行動で知られる美術家の、その“不可

解さ”を目の当たりにするような、記録映像である。さらに興味深いのは、ダリ本人が、自分、ベラスケス、マネ、モンドリアン、ピカソの5人の美術家に対して、「技術」、「靈感」、「天才」、「創造性」、「正当性」の項目で20点満点の採点をした結果を伝える場面である。美術史が伝えるように、ダリが、ベラスケスを高く評価していたことがわかるし、ベラスケスに次ぐ美術家を自己であると認識していたことも理解できる。また、「サルバドール・ダリの世界」では、番組最後の字幕で、ナレーション、構成、撮影、編集などのスタッフの名前が明示され、美術番組制作の方法論が少しずつ構築されている様子がうかがわれる。

「文化展望 正倉院ガラスの謎」は、正倉院の6つのガラスの器がどこで作られ、そしてどうやって伝わったかを検証する内容である。類似するガラス器を所有する、小説家・松本清張氏の話や、現在のガラス工場の風景などの映像も織り交ぜ、重層的な内容になっている。アーカイブスのコンテンツでは、途中から音声が入り切れ、詳しい内容が聞き取れなくなるのが残念である。

「モナ・リザ展」は、現在もなお、展覧会入場者数1位(150万5,239人)の記録を保持している。ただし、この、日本の美術展覧会史上特筆すべき同展は、メディア・イベントではなく、主催は文化庁、東京国立博物館、国立西洋美術館である。日本の展覧会の毎年の入場者数のランキングでは、現在に至るまで、上位のほとんどはメディア・イベントの展覧会であるが^(註21)、「モナ・リザ展」は、特例である。そして、「モナ・リザ展」をめぐる番組作りを見ると、美術番組の定番スタイルを少しずつ形成しているように思われる。それは、史実も含むドキュメンタ

リー性、現代的な話題性、開催中の展覧会報道などを、盛り込むというスタイルである。

「日曜美術館」前史は、実験的な番組づくりから、徐々に美術番組のスタイルを形成してゆく過程として位置づけることができる。

3. 「日曜美術館」史

このような、美術関連の番組作りの模索期を経て、1976年に、定期的な番組として登場したのが「日曜美術館」であった。「日曜美術館」では、テーマを設定してゲストを招いて解説、番組後半の15分は、「今週のギャラリー(現在は「アートシーン」)」という開催中の展覧会紹介を行うというスタイルを、現在も踏襲している。30年以上の番組の歴史においては、この基本的なスタイルは保持しながらも、司会者やテーマ音楽などの変遷を経ながら(表1)、さまざまな試みが行われてきた。

「日曜美術館」で、番組開始から8年間続いたのが「私と〇〇」という企画である。美術関係者以外の人々が、美術について語ることも多く、例えば作曲家・武満徹氏の「私とルドン」(1980年)、映画監督・大島渚氏の「私と鶴岡政男」(1981年)、随筆家・白州正子氏の「私と黒田清輝」(1981年)、漫画家・手塚治虫氏の「私と鳥獣戯画」(1982年)など、一見、意外な語り手による美術論が展開された。研究者は、上記を含む「私と〇〇」の代表的なコンテンツを閲覧した。思いもよらない見地や、作品と話し手との印象深い関係性など、興味深い内容も少なくない。このような映像記録こそ、アーカイブ化される意義のある対象と言える。「私と〇〇」終了後も、現在まで、意外

表1 「日曜美術館」の司会者とテーマ音楽作曲家

担当年	司会者	音楽
1976年4月～1979年3月	太田治子、河路勝アナウンサー	不明
1979年4月～1982年3月	藤堂かほる、西橋正泰アナウンサー	同上
1982年4月～1984年3月	堀尾真紀子、和田篤アナウンサー	同上
1984年4月～1987年3月	浜美枝、国井雅比古アナウンサー	広瀬量平
1987年4月～1988年3月	横山正美、国井雅比古アナウンサー	同上
1988年4月～1990年3月	加賀美幸子アナウンサー	同上
1990年4月～1993年3月	俵万智または渡辺雪子、斎藤季夫アナウンサー	同上
1993年4月～1995年3月	真野響子、斎藤季夫アナウンサー	同上
1995年4月～1997年3月	大岡玲、桜井洋子アナウンサー	久石譲
1997年4月～1998年3月	西村由紀江、石澤典夫アナウンサー	服部隆之
1998年4月～1999年3月	森口瑠子、石澤典夫アナウンサー	同上
1999年4月～2000年3月	緒川たまき、石澤典夫アナウンサー	同上
2000年4月～2001年3月	織作峰子、石澤典夫アナウンサー	同上
2001年4月～2002年3月	中村幸代、石澤典夫アナウンサー	同上
2002年4月～2003年3月	はな、石澤典夫アナウンサー	同上
2003年4月～2006年3月	はな、山根基世アナウンサー	同上
2006年4月～2007年3月	壇ふみ、野村正育アナウンサー	同上
2007年4月～2009年3月	壇ふみ、黒沢保裕アナウンサー	同上
2009年4月～2011年3月	姜尚中、中條誠子アナウンサー	千住明
2011年4月～2013年3月	千住明、森田美由紀アナウンサー	同上
2013年4月～現在	井浦新、伊東敏恵アナウンサー	同上

筆者作成



図1 NHK 教育「日曜美術館」(1976年4月11日放送)より。NHK 提供。

なゲストに美術家や美術作品について語ってもらう方法は、見受けられる。最近の事例では、藤田嗣治をテーマにした回の、ルポライター・立花隆によるコメントや(2006年)、ロートレックをテーマにした回の、女優・夏木マリの解説(2011年)などが挙げられる。

同番組では、ほかに、単発のテーマと並行しながら、1980年から92年まで、美術家のアトリエを訪ねてインタビューする「アトリエ訪問」、1988年から2003年まで、各地の美術館を紹介する「美術館への旅」などにも取り組んだ。また、短期のシリーズとしては、1977年の「空想美術館を語る アンドレ・マルロー」(連続3回シリーズ)、2005年の「シリーズ戦後60年」(同)がある。

司会者の組み合わせも、2003年4月～2006年3月の、はな氏と山根基世アナウンサーの女性コンビを除いては、男女の組み合わせで、一方がNHKのアナウンサーのスタイルである。ただ、アナウンサー以外の司会者は、作家・太田治子氏にはじまり(図1)、俳優・井浦新氏に至るまで、美術の専門家に偏ることなく、さまざまな領域から選出していることがわかる。

ゲストそして、司会者も含めて、一貫して積極的に別領域から採用してきたのは、とかく視聴者が愛好者に限定されがちな、美術という領域において、少しでも幅広い観客を開拓したいという、制作側の意向であると考えられる。同時に、アーカイブズとして考えるとき、それは結果として貴重なコンテンツになる。もちろん、美術の専門家による解説のなかにも、貴重なものもあるが、意外性のある語り手の見解には、新鮮な驚きをもたらすものも少なくない。これは、美術関係者にとっても刺激になる。さらに言えば、美術関係者は、巨大なマスに開かれたテレビという媒体においては、美術鑑賞によって得られる喜びや、深い感動、面白さが伝わるような解説が求められていることを忘れてはならないだろう。ただ、「日曜美術館」の、30年余りの歴史を振り返ると、司会者、ゲスト、共に、すべてが美術の素晴らしさを伝えてきたとは限らない。しかし、テレビジョンの画面は、芸術について語る時、出演者の感情をありのままに伝えてきたように感じられるところに

特徴を見いだすことができる。その理由は、芸術作品が人の精神の感情に触れあう対象だからであろう。

4. 「日曜美術館」周辺 専門分化へ

さて、「日曜美術館」の開始後、他にどのような美術番組が登場したのだろうか。列举すると、「NHK 特集 ルーブル美術館」(1985年)、「国宝への旅」(1986年4月～1989年10月)、「工房探訪・つくる」(1989年4月～1991年3月)、「土曜美の朝」(1993年4月～2001年3月)、「国宝探訪」(2000年4月～2003年3月)、「美と出会う」(2001年4月～2003年3月)、「世界美術館紀行」(2003年4月～2006年3月)、「迷宮美術館」(2003年4月～2010年3月)、「美の壺」(2006年～現在)などが挙げられる。なお、これら以外にも、単発の企画や、特集も存在する。以下、閲覧できたものについて、検討してみたい。

「NHK 特集 ルーブル美術館」は、閲覧可能メディアがなく、内容確認はできなかった。「国宝への旅」は、国宝をレポートする番組で、その第一回目では、尾形光琳《紅梅白梅》を、作家・村松友視が、所蔵するMOA美術館を訪ねた。そして、「国宝探訪」は、この番組の続編と考えられる。「日曜美術館」同様、美術関係者以外の語り手による、作品鑑賞、紹介である。「工房探訪・つくる」は、残念ながら閲覧可能なメディアではなかったために、内容確認はできなかった。検索リストを見ると、例えば、陶芸家・鯉江良二、漆芸家・中野孝一などの名前が確認できる。工房を訪ねる内容と考えられる。「土曜美の朝」、「美と出会う」は、美術家のインタビュー番組である。インタビュアーは、山根基世アナウンサーが担当した。両番組には、画家や彫刻家、陶芸家、染織家、映画監督、写真家、建築家、漫画家など、さまざまなクリエイターが登場している。現在、国内外で活躍中の美術家・草間彌生(2001年4月)や、建築家・黒川記章(2002年11月)といった人々の、アトリエでの制作風景、制作方法、ものづくりに対する思い、苦心談など、貴重なアーカイブズと言える。「世界美術館紀行」は、世界各国の美術館を紹介するもので、美術館設立の秘話や収蔵作品などが、映像とナレーション(石澤典夫アナウンサー)で描出されている。ただし、扱う美術館によっては、単なる作品紹介に重きが置かれてしまう場合もある。「迷宮美術館」は、司会の段田安則が美術家の生涯をコメディ・タッチで演じるといった、バラエティーの要素を盛り込み、美術作品や美術家に関するクイズにゲスト(番組ではキュレーターと呼ばれる)が挑戦するという内容である。

「日曜美術館」がスタートした後の美術番組は、専門分化していった。専門化的な美術番組とは、国宝に焦点を当てた「国宝への旅」、「国宝探訪」、インタビューを主体にした「土曜美の朝」、「美と出会う」、世界の美術館に目を向けた「世界美術館紀行」、家具、着物、建築など、暮

らしのなかの隠れた美や作り手のこだわりなどを掘り下げる「美の壺」などである。同時に、「迷宮美術館」のような、バラエティーとクイズの要素を盛り込んだ実験的な内容のものもある。

番組を見てみると、作品鑑賞に加えて、アーカイブズとして残すことを指向する番組と、美術作品の素晴らしさや面白さを人々に伝えることを目指す番組に大別できるように思われる。「国宝への旅」や「土曜美の朝」などは前者、「迷宮美術館」、「美の壺」は後者である。これらの番組群は、「日曜美術館」という定期的な番組を一つのベースにしながらも、視聴者のニーズや制作者としての使命を考慮した結果として見受けられる。

5. 番組コンテンツと時代

次に、美術に関する価値観がどのように番組に反映されていたかという視点から、美術番組の系譜を検討してみたい。

まず、「日曜美術館」スタート以前、1950年代から60年代は、戦後日本の、美術や文化システム構築の模索期と重なる。テレビ番組そのものも揺籃期であり、どのような提示の方法が必要かつ適切なのか、試みを重ねている段階といえる。当時日本で開催されていた展覧会を照合してみると、1949年から年一回15回にわたって開催されていた『読売新聞』主催の「読売アンデパンダン展」のような、出品料を支払えば作品展示ができるという方法で、美術家に展示の機会を提供した企画や、1954年の『朝日新聞』主催「ルーブル・国立美術館所蔵フランス美術展」のような、海外所蔵作品を展示する大規模な海外展の先駆など、美術展覧会もさまざまな試みが開始した時期であった。美術とは何か、オリジナルを鑑賞するとはどういうことか、それをマス・レベルで考え、経験する時代の始まりだった。先に触れた、「日本の美 日本の文様」のような、情報提供や作品鑑賞というよりも、映像そのものが芸術作品のような番組の成立が可能だったのも、模索期の時代だったからこそと言えるだろう。

70年代は、メディア・イベントの展覧会が発達し、同時に美術館設立も相次ぐ時代である。すでに60年代、1964年『朝日新聞』主催「ミロのビーナス展」(国立西洋美術館、831,198人)、1965年同主催「ツタンカーメン展」(東京国立博物館、1,297,718人)など、「モナ・リザ展」に次ぐ入場者獲得数を記録する展覧会が開催されており、続いて70年代は、71年の『毎日新聞』主催「ゴヤ展」(国立西洋美術館、555,903人)や、『読売新聞』主催「ルノワール展」(西武美術館、574,502人)など、入場者数50万人を超す展覧会が開かれた。数多くの人々が、新聞の報道にも影響されながら、美術展覧会でオリジナルを鑑賞するという経験を重ねるようになってきた。その社会状況を反映し、「モナ・リザ展」に関しても、積極的な番組作りが行われたと考えられる。また、1975年の「サル



図2 NHK教育『日曜美術館』(1981年5月31日放送)より。NHK提供。

バドール・ダリの世界」(註22)、同年「文化展望 正倉院ガラスの謎」などは、作品の鑑賞を助け、美術家の天才性を伝えるなど、美術の受容者の層が厚みを増そうとしている状況に込めている。日本において、美術番組の形成は、日本の美術展の発達と少なからず関わっていると考えられる。また、70年代は、美術館数が急増した時代でもある。文部省の社会教育調査によれば、1960年度51館だったが、1978年度には135館、1987年度には223館に増加している。社会全体が、美術展覧会を受容する方向へ向かい、「日曜美術館」のような定期的な番組が設定される必然性も理解できる。そして、テレビ局も社会の状況を反映したコンテンツ作りへ、目を向けるのである。

6. 「日曜美術館」というコンテンツの特徴と分析

さて、NHKはコンテンツ制作のみならず、展覧会の主催事業、すなわちメディア・イベントの展覧会にも取り組む。1981年「アングル展」(国立西洋美術館)を皮切りに、現在まで展覧会事業を継続させている。この時、「日曜美術館」でも、同展の紹介が行われた(図2)。通常は45分間がテーマに沿った内容で、残り15分が展覧会紹介であるが、「アングル展」は、1時間にわたって紹介した。司会の藤堂かほる氏と西橋正泰アナウンサーが、展覧会会場の国立西洋美術館から、美術評論家・中山公男、画家・向井潤吉らの話を交えながら、展示作品や画家・アングルについて伝えた。このように、現在も「日曜美術館」では、開催中のNHK主催を含む、メディア・イベントの展覧会をテーマにすることが少なくない。

つまり、「日曜美術館」というアーカイブズの特徴は、まず、日本の戦後美術展覧会史をたどる側面を有しているところにある(註23)。同時にマス・メディア文化事業の志向を示し、日本人の美術受容史の様相を呈している。そして、報道的価値観、すなわち、マス・メディアが、番組として、展覧会事業として、取り上げるにふさわしいと判断したコンテンツの歴史でもある。

すなわち、戦後美術展覧会史、マス・メディア文化事業の志向の示唆、日本人の美術受容史、報道的価値観の歴史を内包しているのが、「日曜美術館」のコンテンツとして

の特徴である。

また、他局の美術番組では、例えば「美の巨人たち」(テレビ東京系列、2000年～)がある。コンテンツのパラエティを考えてみても、日本においては、NHKの美術番組の系譜が他局の美術番組に少なからぬ影響力を持つことは明らかである。今後、他局の美術番組も比較対象にして、研究を進めたい。

IV. 結び

1. 美術番組のアーカイブズとは

美術番組は、元来アーカイブズを視野に入れた領域のように思われる。アーティストが何を考え、制作を行ったか、作品はどのような評価をされたかなどが扱われ、それは番組放送時点のみならず、後年、その作品を改めて検証する際の貴重な資料になる。

美術番組は、故人とのかけがえのない出会いも提供してくれる。『日曜美術館』で、『鳥獣戯画』について、テレビ画面の前で自ら模写を披露した手塚治虫氏、オデュロン・ルドンの幻想的な作品について、情緒豊かな想像力をめぐらせて解説をした武満徹氏…。放送当時は見ることができ得なかった若い観客も、故人となった彼ら独自の美へのまなざしに出会うことができるのである。美術を語る人々が、このように生き生きと受容できるのは、映像ならではである。文字情報だけでは、出会いの感覚は薄い。

美術番組のアーカイブズは、単なる情報提供にとどまることはない。出会い、再会、コミュニケーション、そして新たな発見ももたらしてくれる。

美術番組では、人間の内面における様々な作用や普遍的なテーマが扱われている。その点で、いつの時代でも人々の心に響くコンテンツである。したがって、テレビ番組のコンテンツにおいて、美術番組は実に小さな領域であるとは言え、アーカイブズとして何度も再現が保障される意義も認められる。

2. 美術番組作りとアーカイブズ

アーカイブズの形成は、美術番組制作においてどのような影響をもたらしたのだろうか。制作者の見解を参照してみたい(註24)。まず、美術番組に限らないことだが、使用したい情報がコンピュータ上で簡単に検索できることによって、多様なジャンルのコンテンツを利用して番組制作が可能になった。以前は、制作者に直接尋ねるなどして探し出していたところを、キーワード検索で、関係する資料はすべて探し出すことができ、適切なコンテンツを選択できるようになった。人的アーカイブズがコンピュータ・アーカイブズに変換されたことによって、情報量が増えたのである。そのことによって、番組制作は、アーカイブズの利用が日常化してゆくことにもなった。制作者にとって、一か

ら番組作りをしなくても、それは決して恥ずかしいことではなくなった。

既述のように、美術番組に関しては、アーカイブズ化を前提にした番組が存在する。例えば、「国宝探訪」、「世界美術館紀行」、「土曜美の朝」、「美と出会う」などである。「世界美術館紀行」は、現在、「日曜美術館」の後半15分の時間、随時編集されて放映されている。また、アトリエでインタビューをする「土曜美の朝」、「美と出会う」は、当初は聖域ともいえるアトリエにカメラが入ることそのものに、資料価値が認められていた。しかし、回を重ねるごとに、アトリエにカメラが入ることの新奇性が減退した。活躍中のアーティストのアトリエを訪ねてインタビューするという企画そのものには、アーカイブズとしての価値が認められる一方で、番組のパターン化が、聴衆をひきつける力を弱め、現在はこのような企画は中断されている。また、アーカイブズのコンテンツを主体に制作される番組として、「西洋美術」、「日本の美」など、一つのテーマのベスト100を一日がかりで紹介する「夢の美術館」(1998年～、衛星放送)も登場した。一方、近年増え続けている映像作品は、美術番組でほとんど扱われてこなかった。しかし、絵画、彫刻といった従来の縦割りの分類ではおさまらない表現メディアを用いた作品が登場することを受けて、これらの作品の扱い方が思案されるようになった。例えば、2012年から、注目されている映像作品を取り上げ、その映像技法を紹介する「テクネ 映像の教室」という番組が制作されている。

3. アーカイブズとは

“文化成熟”がアーカイブズへの関心を高めた、と述べた。そして、アーカイブズが構築される社会において登場したのが、コンピュータの普及を前提にした“俯瞰の思想”である(註25)。アーカイブズの出現とその利用から表出した、新しい価値観である“俯瞰の思想”によって、人々は、“分類”によって対象を認識するのではなく、対象の全体像から選出するようになった。そして、“俯瞰の思想”における対象の選出は、利害関係が生ずることはほとんどない。既述のように、18世紀以降、博物学の発展によって登場したのが“分類の思想”だった。“俯瞰の思想”では、分類は前提であり、分類され整理された対象全体を俯瞰することができる。アーカイブズ時代においては、個々の対象の認識方法にとどまらず、個々の対象を含む情報全体を俯瞰することができる。そのことによって、“分類の思想”では、別領域として扱われていたために出会うことがなかった情報を見つけることもできるようになった。“俯瞰の思想”の登場によって、縦横にコンテンツを見渡し、新しい解釈や制作や価値観形成が可能になったのである。

4. 展望

このように、美術番組は、Ⅲで考察したように、時代の美術価値観を鑑みつつ、視聴者のニーズを模索し、そして新しい美術愛好者を開拓することも目指しながら、制作されてきたことが分かった。美術番組の特徴は、Ⅳの冒頭で触れたように、単なる情報提供ではない、普遍的なテーマが扱われているために、いつの時代に人々の心にも響く内容が期待できることである。

次に、これまでの考察を踏まえて、今後のアーカイブズの展望を考えてみたい。一言で言えば、既に述べたように、“俯瞰の思想”による新しい価値観形成と言える。アーカイブズは、分類を超える。例えば、美術番組、報道番組、クイズ番組などといった分類も超えるのである。さらに、美術番組のアーカイブズについて考えれば、美術番組は、そのようなアーカイブズ化のなかで、今後新しい切り口の利用がされていくであろう。同時に、美術そのものの概念が、従来の絵画や彫刻に限定されず、映像や漫画などに拡大しつつある現在、美術番組のコンテンツ形成のありようも変容する可能性もある。そして、美術館そのものが、これまでのように展示、収集、保存、研究のみを行う施設ではなく、このような時代にあつて、情報そのものを提供し、人々が双方向的にコミュニケーションする拠点として成立しうることは自明であるから、アーカイブズは、今後の美術館においても不可欠になると考えられる。

アーカイブズは、単に情報の効率的利用に役立つだけではない。今後の、文化や芸術の価値観変容をもたらす可能性を秘めているのである。

謝辞 執筆に当たり、NHK アーカイブズ・トライアル研究事務局スタッフの方々にお世話になり、感謝申し上げます。そして、次の方々のご教示をいただきました。ここに深く御礼申し上げます。ありがとうございます。倉森京子氏 (NHK エデュケーショナル特集文化部部長プロデューサー)、高橋信裕先生 (文化環境研究所所長)、田中敦晴氏 (NHK エデュケーショナル特集文化部シニアプロデューサー)、増淵敏之先生 (法政大学大学院教授)。(50音順。役職は2012年8月現在。)

註

1. 呼称は、「アーカイブ」、「アーカイヴ」、「アーカイブス」など統一されていないが、ここでは、この名詞が通例複数形で使用されることと、日本の学会 (日本アーカイブズ学会) や、日本でアーカイブズの専門研究をしている大学機関 (学習院大学大学院) において、「アーカイブズ」が用いられている理由から、「アーカイブズ」を使うことにした。なお、NHKは「NHKアーカイブス」という呼称を用いているので、こちらは固有名詞として扱う。
2. 東京国立博物館、東京国立文化財研究所など。
3. 全史料協編『日本のアーカイブズ論』岩田書院、2003年。

4. 前掲、全史料協編、2003年、19ページ。
5. Derrida,1995.; 福本訳、2010年、10ページ。
6. 拙著『芸術受容の近代的パラダイム 日本における見る欲望と価値観の形成』美術年鑑社、2001年、30~31ページ。
7. Foucault, 1966, p.142; 渡辺・佐々木訳、1974年、153ページ。
8. 1826年ニセフォール・ニエプスによる写真の発明以降、人々は見ていないものでもリアルに認識することが可能になった。
9. 任期は、2010年9月~2011年8月。第二期は、トライアル研究実行委員会の審査を経て、11件の研究が採択された。NHKでは、アーカイブズの学術利用に向けた試行運用として、2010年3月からこの事業を開始。
10. 商取引に必要な情報を集めた媒体は、既に中世に存在していたが、定期的、かつ不特定多数の人々に向けた、マス・コミュニケーションを形成する情報発信システムをここでは指している。
11. Veblen,1889.; 小原訳、1961年、98ページ; 高訳、1998年、115ページ。
12. Toffler,1964; 岡村監修、1997年、28ページ。
13. メディア・イベントの定義は、第1に「マス・メディアによって企画され、演出されるイベント」、第2に「マス・メディアによって大規模に中継され、報道されるイベント」、第3に「メディアによってイベント化された社会的事件」とされている (津金澤編、吉見著、1996年、4~5ページ。)。メディア・イベントの展覧会は、第1の定義に当てはまる。この定義に適合するイベントは、日本ではほかに、高校野球、講演会、音楽のコンサートなどを挙げることができる。
14. 拙著『「空想美術館」を超えて』美術年鑑社、2011年、50~58ページ。
15. 前掲、拙著、2011年、16ページ。
16. 前掲、拙著、2011年、46ページ。
17. 前掲、拙著、2011年、31ページ。
18. 2013年に開催された「東日本大震災支援 若沖が来てくれました 江戸絵画の美と生命」展は、仙台市博物館 (3月1日~5月6日)、岩手県立美術館 (5月18日~7月15日)、福島県立美術館 (7月27日~9月23日) の被災地3カ所を巡回し、数多くの人々が観覧した。この模様については、日曜美術館「生命の美 プライスコレクション」(NHK、Eテレ2013年4月21日)、クローズアップ現代「生命の色を被災地へ 17万人が感動 若沖・奇跡の江戸絵画」(NHK総合、2013年8月3日)で放映。
19. この考察の範囲外にある日本の美術作品の授受については、前掲、拙著、2001年、43~74ページ、115~162ページ、2011年、前掲、拙著、50~70ページ。
20. 字幕の説明は以下のとおり。「いつも自然を身近にとっておきたいという日本人の願望は、洗練されて文様として自然を様式的に表現する伝統を生み出した。着物や調度品にちりばめられたこれらの文様は、日本人がもつ自然への感情すべてを語っている。この作品は、日本人の心の底にある独特の感情を描き出すために、15世紀~19世紀までの染織文化と、古くから日本の家々に伝わる紋章とによって構成したものである。」
21. 前掲、拙著、2011年、50ページ。
22. 同年、直接的にダリに関する、大規模な展覧会は開催さ

れていない。東京国立近代美術館で、同館主催の「シュルレアリスム展」(ダリはシュルレアリスムの作家)が開催されているが、番組との深い関連性は薄いと考えられる。

23. NHK カタログ、2006年、274～289ページ。
24. NHK エデュケーショナル特集文化部(美術) 部長プロデューサー・倉森京子氏、同シニアプロデューサー・田中敦晴氏の聴き取りによる。2012年9月。
25. コンピュータの普及によって構築されたのは、コンピュータ・ネットワークである。ネットワークの概念は、「つながりの型」であり、「相互行為的ネットワーク」を主眼にしながらも、効率を上げるための一手段として組織が用いる「戦略的ネットワーク」を併せ持つものと位置づけられる。コンピュータ・ネットワークは、メールやインターネットなどである。コンピュータ・ネットワークによって、情報授受において、フラット化が生じた。フラット化とは、主従関係や社会的地位に関係なく意見を述べたり参加したりすることが可能で、かつ、世界中の多様な情報を見渡せるようなコンピュータ・ネットワークの環境である。コンピュータ・ネットワークと美術作品についての考察は、拙著、2011年、176～203ページ参照。アーカイブズ構築には、コンピュータが果たす役割が少なくない。そして、コンピュータの普及が情報授受の方法をフラット化したことによって、“俯瞰的思想”は、人々により受容しやすいものになると考えられる。

参考文献

Derrida, Jacques *Mal D'Archive : Une Impression Freudienne*, Galilée, 1995. (福本修訳『アーカイヴの病 フロイトの印象』法政大学出版局、2010年。)

Foucault, Michel *Les Mots et les Choses*, Gallimard, 1966. (渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社、1974年。)

NHK、NHK プロモーション『NHK 日曜美術館30年展』カタログ、NHK 出版、2006年。

Toffler, Alvin *The Culture Consumers*, TCOM Corporation Ltd. 1964; (岡村二郎監修『文化の消費者』勁草書房、1997年。)

津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年。

Veblen, Thorstein B. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, Macmillan, 1889. (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫、1961年。高哲男訳『有閑階級の理論 制度の進化に関する経済学的研究』ちくま学芸文庫、1998年。)

拙著『芸術受容の近代的パラダイム 日本における見る欲望と価値観の形成』美術年鑑社、2001年。

拙著『「空想美術館」を超えて』美術年鑑社、2011年。

